

臼杵石仏火まつり

藤原 道夫

火まつりの日（例年 8 月最終土曜日）に合わせて臼杵磨崖仏を見学するツアーに参加したことがある。カンカン照りの日中に臼杵市内を見て回り、明るいうちに現地に到着、磨崖仏は山里の木の繁るなだらかな丘陵の崖に点在していることがわかった。

早速ガイドの案内で見学が始まる。先ず藪の中の大きな不動明王の処に。浮彫りの風化が進んでいるものの、右下歯の一本が上向きに出て上唇を抑えている様子はよく見てとれた。

その後国宝の石仏群を見て廻った。ホキ石仏第 1 群、ホキ石仏第 2 群、山王山石仏、古園石仏と点在しており、それぞれに覆屋がかけられている。

圧巻だったのは古園石仏。ほぼ丸彫りの石仏 13 体が並ぶなかで真ん中の大日如来坐像がひと際大きく、お顔がふっくらしていてやや吊り上がった目じりや眉毛がしっかり彫られており、像全体が量感に溢れている。かつて頭部は下に落ちたまま本体の前に置かれていたそうだが、1993 年まで 14 年にわたる修復の間に元に戻されたとか。

ホキ石仏第 2 群にある阿弥陀三尊像が最も整っているように思えた。これらは平安時代末期から鎌倉時代にかけて彫られ、整った定朝様式の影響を受けていると説明された。一方で威厳もあり、どこか天平彫刻の憂愁を湛えているようにも感じた。

山王山石仏の釈迦如来とされる像は口許がほころびて脛が下がっており、笑い仏の雰囲気漂わせている。

火祭りの日は夕 7 時から石仏の前、村落のお寺やその前に広がる野原に約 1,000 本の松明や篝火が焚かれる。早めの夕食後に自由時間となり、古園石仏の傍らで点火を待った。見物客はほとんどいない。定刻に次々と篝火が灯された。石仏群がポーッと薄明りに浮かぶ。この頃になって見物客も増えてきた。

闇の中で燃え盛る炎は人の心を引き付ける魔力を秘めていて、見飽きない。昔、郷里で体験した墓前での迎え火や小正月に行われた塞の神を思い出した。

他の石仏群も見て廻り、下のお寺の方に移った。前の野原のあちこちに篝火や松明が焚かれている。その風景を眺めていると、何とも言えない不思議な感覚に襲われ、立ちつくした。多くの石仏が織りなす曼荼羅の世界に炎の力によって引き込まれたのだろうか？